

論文

アシジの聖フランシスコの「平和の祈り」の由来

木村晶子*

1. はじめに

「ああ主よ、われをして御身の平和の道具とならしめたまえ」という祈りで始まる「平和の祈り」は、一般に「アシジの聖フランシスコの平和の祈り」と呼ばれ、現在では世界中に知られている。この祈りはカトリック教会のみならず、プロテスタント教会においても、また、仏教徒やイスラム教徒であっても、平和を願う人々ならばこの祈りを唱えているに違いない。そして、多くの人々が、この祈りは聖フランシスコが作ったものと信じていたに違いない。

しかし、20世紀後半になってからこの祈りはフランシスコ作のものではないという指摘がフランシスコ会の研究者たちによってなされ、そのオリジナルのテキストと作者を追究しようという試みがなされてきた。実際、フランシスコのものとする手紙やその他の書き物には、この祈りは全く見られないのである。

「平和の祈り」は聖フランシスコが書いたものではないと最初に指摘したのは、フランス人フランシスコ会士である、ジャン・フランソワ・バルビエール (1911-1990) である。彼によれば、もしフランシスコが書いたものであるなら、彼の文体の特徴であるように、「あなた」、あるいは「主」・「わが神」が主語となるはずだが、この「平和の祈り」と呼ばれる祈りにはそのような特徴が見られないという。¹

この指摘を受けて、フリーデル・シュルツ、ダミアン・ヴォロー、ヴィリブロード・ファン・ディック、ジェローム・プーランクといった同じくフランシスコ会の研究者たちがあとに続いてこの謎を解こうと文献を探してきた。日本では、堀田雄康が彼らの研究をもとに同じ研究を進めていた。この5人の文献によれば、フランスのノルマンディー地方の小さな町にあった信心会が、巡礼者のために一冊の雑誌を発行していた。その雑誌は『平和の聖母』(Les Annales de Notre Dame de Paix) と呼ばれ、この雑誌の1913年1月発行の第95号にこの祈りが掲載された。そして、注目すべき点は、その中に「別の雑誌から借用して引用したものである」というコメントが添えられていたことである。その別の雑誌とは、“La Clochette” (『鈴』) という名であった。これまで、この雑誌は、どこにもないものとされてきたが、近年、パリ国立国会図書館で発見され、クリスチャン・ルノーによって『聖フランシスコ作とされる平和の祈り』が出版されて、新たな発見も加えられた。

本論では、前述の5人の研究成果に加え、ルノーの研究の内容も合わせて、「平和の祈り」がどこで、誰によって作られたものであるのか、またこの祈りがどのように知られていったのかを検証してゆきたい。

2. “La Clochette”（『鈴』誌）とブークェレル神父

「平和の祈り」と呼ばれる祈りが最初に載った雑誌は、“La Clochette”（『鈴』）という名の雑誌であり、パリに本部があった“Ligue de la Sainte-Messe”（聖なるミサの使徒団）という信心会の月刊誌であった。しかし、つい最近までは、この雑誌はこれまで発見されず、幻の雑誌であった。ただ、フランスのノルマンディー地方の小さな町にあった信心会が、巡礼者のために発行していた『平和の聖母』（Les Annales de Notre Dame de Paix）という雑誌の1913年1月発行の第95号にこの祈りが掲載され、その中に「別の雑誌、『鈴』から借用して引用したものである」というコメントが添えられていたので、この『鈴』誌の存在がわかっていたのである。² ところが、1997年、この『鈴』誌がパリ国立図書館で見つかったのである。

（次頁、Renoux “Lsa priere pour la paix attribuee a saint Francois, p.24より転載）この発見は「平和の祈り」のオリジナルテキストの存在を証明するものとして非常に意義あるものである。ルノーによれば、確かに1912年12月発行の“La Clochette”（『鈴』誌）に、現在「平和の祈り」と呼ばれている祈りが載っており、この月刊誌が、エステル・オーギュスト・ブークェレル神父(P. Esther Auguste Bouquerel)というノルマン人神父によって発行されていたことが明確にされた。

ブークェレル神父は、1901年10月に「ミサにもっと敬虔な心で与り、熱心にご聖体に対する祈りを捧げることを勧めるために、“Ligue de la Sainte-Messe”という信心会を設立した。同時に、この精神を広めるため、ブークェレル神父は“La Clochette”という月刊誌を発行した。この信心会の本拠地はパリ、ニコロ通り16区25番地であり、現在もその建物は残っている。もともとこの家は、「御心の使徒会」という教区司祭の信心会が使用していた建物であった。1910年頃には8000名ほどの購読者がいたようである。1912年12月の第12号に、現在「平和の祈り」と呼ばれている祈りが初めて掲載されたのであるが、このときは、ブークェレル神父の主旨に従って、「ミサの間に唱える祈り」(Belle prière à faire pendant la Messe)というタイトルがついていた。³ しかし、ブークェレル神父はこの祈りに関して何のコメントも付しておらず、作者についても何も述べていない。また不思議なことに、この祈りは“La Clochette”が1919年6月に廃刊となるまで、二度と掲載されなかったのである。⁴

ここで、ブークェレル神父について少し紹介しよう。彼は1855年3月23日、オルヌ県生まれであり、1877年から1879年まで、ローマの神学校で学び、教会法のバカロレアと神学博士を取得し、1878年、司祭に叙階されている。その後、フランスに戻り、大神学校で教鞭を取っていたが、1887年に辞職することになった。そのほかにも、彼はノルマンディー教区でさまざまな働きをしていた。ペローのフランシスカン共同体の担当司祭やフランシスコ会第三会員の功績を称える書物を執筆するなど、多彩な面を見せていた。そのうち、1889年からオルヌ県の



UNE MESSE

*sera dite pour les Zélateurs et Zélatrices de la Ligue, pour ses Bienfaiteurs et pour tous les lecteurs de La Clochette, le **VENDREDI 6 DÉCEMBRE.***

Instante prière d'y assister ce jour-là et d'y faire la sainte communion.

REDACTION & ADMINISTRATION

25, Rue Nicole, PARIS-XVII

La page de couverture du numéro de décembre 1912 de La Clochette (Photo Bibliothèque Nationale de France)

Belle Prière à faire pendant la Messe

Seigneur, faites de moi un instrument de votre paix.

Là où il y a de la haine, que je mette l'amour.

Là où il y a l'offense, que je mette le pardon.

Là où il y a la discorde, que je mette l'union.

Là où il y a l'erreur, que je mette la vérité.

Là où il y a le doute, que je mette la foi.

Là où il y a le désespoir, que je mette l'espérance.

Là où il y a les ténèbres, que je mette votre lumière.

Là où il y a la tristesse, que je mette la joie.

O Maître, que je ne cherche pas tant à être consolé qu'à consoler, à être compris qu'à comprendre, à être aimé qu'à aimer, car c'est en donnant qu'on reçoit, c'est en s'oubliant qu'on trouve, c'est en pardonnant qu'on est pardonné, c'est en mourant qu'on ressuscite à l'éternelle vie.

*La première publication de la prière dans le numéro de La Clochette de décembre 1912
(Photo Bibliothèque Nationale de France)*

『ラ・クロワ』の編集長に任ぜられた。⁵

その一方で、“Souvenir Normand”（『スヴニール・ノルマン＝パリー＝オルネ』）という雑誌を1897年から出版しはじめた。この雑誌は1898年に行われた議員選挙のために作られたもので、パリ在住のオルヌ県出身者にオルヌ県のニュースを伝えるためでもあった。この広報は成功し、カトリック派の議員の当選につながった。この記事において、作家ゾラやユダヤ人、フリー・メイソン、プロテスタント、イギリス人、ドイツ人を「敵」と位置付けているのでカトリック内の中でもかなりの右派と言えよう。⁶ その後、1907年に、パリに落ち着き、前述のニコロ通りの建物に、教区司祭のグループである「御心会」を指導していたルベリエール司教 (Mgr Lebeurier) とともに住むようになった。そして、次第にこの司祭団の指揮を執るようになっていった。彼はご聖体を崇める運動に没頭してゆき、その事務局の責任ある立場に就いたり、さまざまな執筆活動に携わっていた。⁷

1914年の夏に勃発した第一次世界大戦時には、彼は“La Clochette”誌において平和キャンペーンを展開した。フランスが神の国となるよう、ミサを捧げることを奨励しているが、この「平和の祈り」に関しては、1912年以降、何も触れていない。

3. 『平和の聖母』誌とボワセー神父

同じ頃、北オルヌ県ボーシュヌに、ルイ・ボワセー神父 (P. Louis Boissey) という司祭がいたが、国家・民族・教会・家庭などの平和を願い、『平和の聖母』という教会を建設するプロジェクトを始めた。その際、『平和の聖母』(Annales de Notre-Dame de la Paix) という月刊誌を発行して、ノルマンディー中に寄付を募り、信心会を始めた。第一号は1904年3月であった。この月刊誌は、第一次世界大戦の間は、休刊となったが、その後は、1939年11月まで定期的に発行された。ボワセー神父はこの雑誌の中で「平和主義」について述べたことで論争的となったが、ブークェレル神父と思想的に共通点があったので、互いに親交があったようである。そして、この雑誌の1913年1月発行の第95号に問題の「平和の祈り」が掲載されたのであるが、何のコメントもなく、単にこの祈りは“La Clochette”から引用されたと添えられているだけであった。この引用の際、単語の小さな修正が行われ、これ以後、さまざまな「平和の祈り」のバージョンが出るようになっていった。⁸

4. 「スヴニール・ノルマン」とロシュトロン・グラント侯爵

そのうち、この『平和の聖母』の1913年1月号は、フランスを越えてカトリック教会に大きな影響を与えることとなった。たまたまこの月刊誌を読んだ、ノルマン人、スタニスラス・ロシュトロン・グラント侯爵は、問題の「平和の祈り」を発見し、この祈りの中に自分の願いを込めてフランス中に広めようと考えた。⁹ つまり、彼は、自らをウィリアム征服王の子孫であると称し、ヨーロッパは皆この一人の王の子孫であるということを根拠に、ヨーロッパを平和のうちの統一しようとする思いをこの祈りに託したのである。ロシュトロン・グラント侯爵は、この希望をもって「スヴニール・ノルマン」という信心団体を19世紀の終わり頃、設

立した。この団体の活動は「ノルマンディー・リバイバル」ともいうべき運動であった。このような運動を通じて、ロシュトロン侯爵は教皇庁とも親しくなり、当時ピオ10世の秘書であったフェラータ枢機卿に、「スヴニール・ノルマン」が神の平和を再び取り戻すためにキリスト者として努力しているかということを知らせる手紙を、1914年10月に送っている。残念ながらこのときは、フェラータ枢機卿が同月10日に亡くなってしまったために、この手紙は日の目を見ることはなかった。

しかし、翌年の1915年、侯爵の努力は報いられ、新しい秘書となったガスパッリ枢機卿に同じ内容の手紙を送ることができた。そして、このときから、「平和の祈り」も同時に普及させる機会を得ることとなったのである。¹⁰ 1915年12月、ロシュトロン侯爵はローマに「スヴニール・ノルマン」の代表者を送り、ガスパッリ枢機卿を通じて教皇ベネディクト15世(1914年9月教皇就任)に2つの「平和の祈り」と「ノルマンディーの聖母への祈り」を献上している。このとき、ガスパッリ枢機卿は、感謝の手紙をロシュトロン侯爵にあてて送っている。この出来事はそのことが1916年1月20日号の“Osservatore Romano”紙に載っており、次のように報道されている。

「スヴニール・ノルマン」は平和のための祈り文をいくつか教皇聖下に献上した。その中から、ウィリアム征服王の遺言に拠って作られた聖心に捧げられた祈りをここに掲載した。以下、感動すべき単純さの祈り文そのままである。¹¹

(次頁掲載、バチカン図書館所蔵)

「平和の祈り」(la prière pour la paix)が別名「単純な祈り」(la prière simple)とも呼ばれるのは、この文面から来ていると思われる。同時に「聖心に捧げられた祈り」とみなされていることも注目値する。興味深いことに、その中でこの祈りを「イエスの御心に捧げられた感動的な祈り」と呼んでいるのである。¹² 教皇ベネディクト15世はこの祈りを大変喜ばれ、特に「イエスの聖心への祈り」ということに大変感動されたという。ベネディクト15世は戦争中ということもあって平和を推進することに大変熱心であったので、この祈りの意向は教皇の意向にも沿うものであったであろう。¹³ そして、祈りのタイトルとして「1087年9月9日のウィリアム征服王の遺言に拠るスヴニール・ノルマンの聖心への祈り¹⁴」となっていたという点も重要である。つまり、同じ「平和の祈り」でも、一つには「スヴニール・ノルマン」が作成したかのようにタイトルを付していたということである。おそらくこれには、ヨーロッパにおけるカトリック復興のために、ウィリアム征服王の遺言を担ぎ出そうとするロシュトロン侯爵の思惑と、ベネディクト15世の「聖心への祈り」への思いが反映された結果ではないだろうか。¹⁵

さらに、「スヴニール・ノルマン」の献上が確実であることを証拠となるものは、その直後の1916年2月3日に発行されたフランスのカトリック新聞『ラ・クロワ』(La Croix)紙の報道である。この報道によれば、1月25日にバチカンの國務長官ガスパッリ枢機卿が、教皇

ベネディクト 15 世に祈りが献呈されたことを感謝するために、「スヴニール・ノルマン」の創設者であり、代表者であるロシュトロン・グラント侯爵に感謝の書簡を送ったと伝えている。また、『ラ・クロワ』はその数日前、つまり、1 月 28 日に他の筋から「平和の祈り」のテキストを入手し、この祈りを「スヴニール・ノルマンの平和の祈り」と掲載していたのである。これは、『鈴』誌による祈りとは数箇所異なり、1916 年 1 月 20 日号の “Osservatore Romano” 紙に載ったイタリア語版をフランス語訳したものらしいが、ここでさらにいくつかのことばが変更されている。¹⁶

この『ラ・クロワ』の報道の影響は大きく、その結果、変更が加えられた「スヴニール・ノルマンによる平和の祈り」がオリジナルとして公表されることとなってしまった。ロシュトロン侯爵もこの誤りは自分の責任であると感じて、心配になったと思われる。1916 年 2 月 3 日の『スヴニール・ノルマン』誌で「この祈りは最初、1913 年 1 月号の『平和の聖母』に掲載された。」と述べ、ボワセー神父を「ボーシュヌの敬虔な司祭」と称えている。¹⁷ しかし、ロシュトロン侯爵は『平和の聖母』に “La Clochette” から引用していると書かれている点を無視したのか “La Clochette” については触れていない。¹⁸

他方、もう一つの「平和の祈り」のバージョンは、ボワセー神父が書いたものである。前述のように、このバージョンはいくつかの単語を修正したものである。この後、「平和の祈り」は、使用する側の思いがことばに表され、次第に変更が加えられ、「スヴニール・ノルマン」の祈りをはじめとしてさまざまなバージョンの祈りが現れることになるのである。

こうして、この祈りは、「単純な祈り」・「平和の祈り」・「聖心に捧げる祈り」という名のもとに、教会に公認された祈りとなったのである。つまり、この時点では全く聖フランシスコとは結び付けられていないという点に注目すべきである。

5. ポン司教の著作

更に、問題の「平和の祈り」を広めるのに貢献した人物がいる。その人物は、ポン司教 (Mgr. Alexandre Pons 1887-1938) である。彼はいくつかの著作を発表しているが、1917 年に出版した『試練のときに』という著書の中で、「平和の祈り」を『スヴニール・ノルマン』から引用したという断りを付記しているのである。ポン司教は、「この祈りは『ラ・クロワ』に掲載されたテキストと同じである」と述べ、さらにこの祈りに「明日は今日より良い日となることをと望む人たちの祈り」という新たなタイトルをつけているのである。¹⁹ その上、誤解を招くような文を残しているために、さらにこの祈りの作者がますますわからなくなる原因を作ってしまった。つまり、彼は、「この祈りはウィリアム征服王の遺言に基づいた大変古い祈りであり、スヴニール・ノルマンがベネディクト 15 世に献上したときに教皇は大変お喜びになった。」と述べている。この「大変古い祈り」という表現が聖フランシスコにいたることになった原因のひとつかもしれない。²⁰ しかし、ここでも聖フランシスコについては言及されていない。

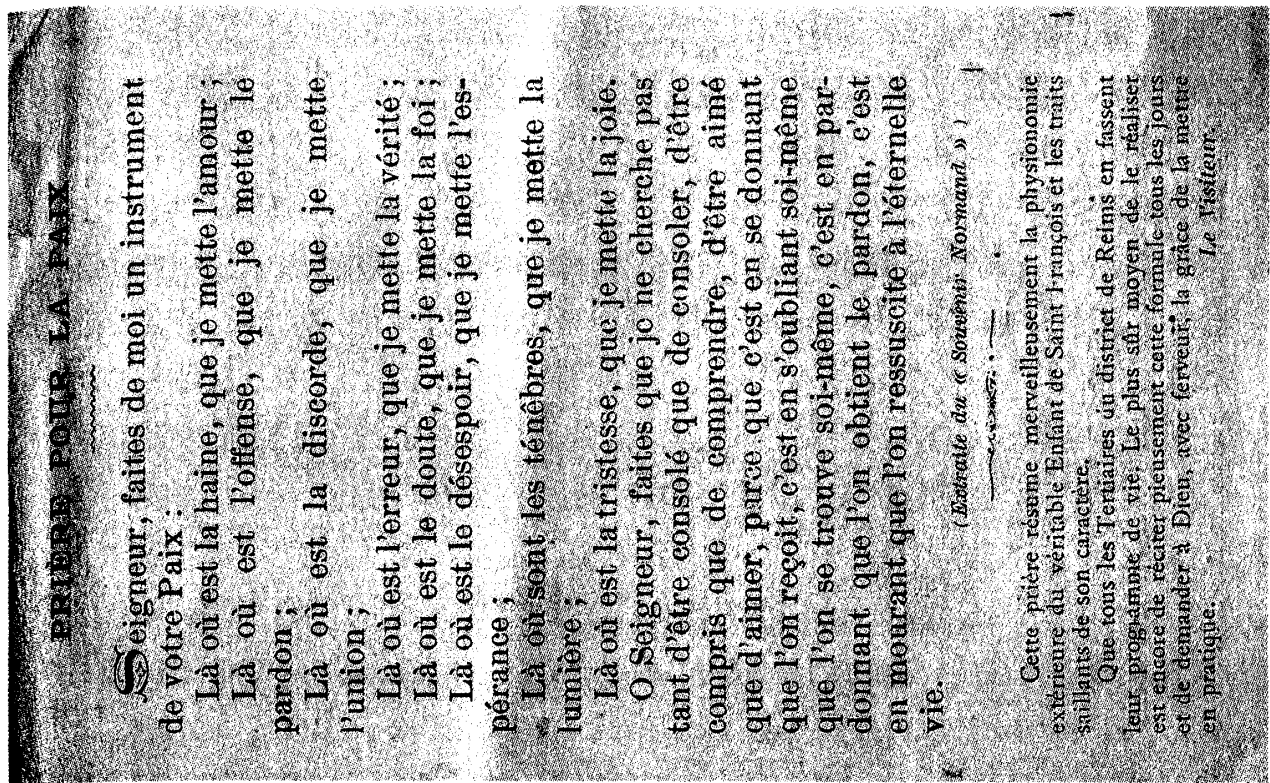
6. ランスのフランシスコ第三会発行の御絵

フランスのランスで、70年ほど前のこと、フランシスコ会第三会の会員のために一枚の御絵が印刷された。その御絵の表にはある人物が描かれ、それは明らかに聖フランシスコである。(次頁、Renoux, “La Prière pour la Paix” p. 73 より転載) この御絵には、Saint François d’ Assise-Le Père Illustre d’ une Race Innombrable 「アシジの聖フランシスコ—数知れない人々の名高き父」と下に書かれている。そして一番上には、Louè soit Jèsus-Christ toujours 「イエス・キリストは常にほめ讃えられますように」と記されている。聖フランシスコは右手に十字架を、左手に開いた本を持っているが、「第三会会則」と書かれている。そして、御絵の裏には、” PRIÈRE POUR LA PAIX ” 「平和の祈り」というタイトルがあって、その下に祈り文が印刷されている。また、右下隅に、Visitor、つまり、「巡察使」にあたる語が見える。これは、ヴィジタールがこの御絵の発案者であったことを示す。そして、この8行ほどの文章は、「この祈りは驚くほど真の聖フランシスコの子どもの様相を表しており、その精神を明確に要約している。ランス地方の第三会員はこれをその生活の規範とすべし。そして、毎日この祈りを心から唱え、フランシスコ第三会員としての生活を実践できる恵みを熱心に神に祈りなさい。」という勧告である。ここで初めて、フランシスコとこの祈りの結びつきが意識されるようになる。

さらに、よく見てみると、祈り文とヴィジタールの言葉との間に一行が見える。それは、“Extrait du Souvenir Normand ” 「スヴニール・ノルマンから転載」と書かれている。ここにも、「スヴニール・ノルマン」が登場してくる。この「スヴニール・ノルマン」が、ブークエレル神父が発行していた『スヴニール・ノルマン—パリー—オルネ』誌を指すのか、ロシュトロン侯爵の団体の「スヴニール・ノルマン」から出されていた『スヴニール・ノルマン』誌のどちらを指すのか紛らわしい。しかし、このランスの御絵の祈りのテキストが、ベネディクト15世に献呈されたものや、『ラ・クロワ』とも同じであり、1916年2月3日の『スヴニール・ノルマン』誌の中で「この祈りは最初、1913年1月号の『平和の聖母』に掲載された。」と述べられているので、おそらくこの「スヴニール・ノルマン」は、ロシュトロン侯爵の団体の『スヴニール・ノルマン』誌であろうと思われる。

そして、このランスの御絵は、多くの人々に気に入られ、広まってゆくうちに、「スヴニール・ノルマンから転載」という断り書きが、「聖フランシスコの祈り」という添え書きに取って代わるようになっていったのではないかと思われる。

このヴィジタールはカプチン会のエチエンヌ・ベノワ神父(P. Étienne Benoît)で、1912年12月7日にその任についたことがわかっている。ところで、第一次世界大戦は1914年に勃発し、ランスの町はその直後、戦場と化したのだが、そのことについては触れていない。従って、おそらくこの御絵の発行は少なくとも、戦争が始まる前ではないかと推測される。それで、シュルツは、エチエンヌ神父のヴィジタール就任と第一次世界大戦の時期からみて、ランスの御絵は1912年7月から1914年7月の間に作られたとみるのである。なぜ「7月」なのかというと、1914年7月28日にオーストリアがセルビアに戦線布告をして戦争が勃発して



Recto et verso de l'image imprimée à Reims par le P. Étienne Benoît pour le tiers-ordre de Saint-François (Doc. Christian van Dijk. Bibliothèque des Capucins. Paris)

いるので、大体の目安として、7月を取ったのだらうということである。²¹

一方、ファン・ディックは1916年以降、あるいは1918年以降に発行されたのではないかと述べている。ルノーは、この聖フランシスコの絵が1913年2月に描かれたものであるという点と、祈りのテキストがベネディクト15世への献呈版、さらに『ラ・クロワ』版やポン司教のテキスト(1917年)と同じであることから、ファン・ディックと同様に、1916年以降、あるいは1918年以降に発行されたのではないかと述べている。²² さらに、「スヴニール・ノルマン」より転載されているということからすると、1916年以降とする説の方が有力である。

7. アンジェ・ミシエルの御絵

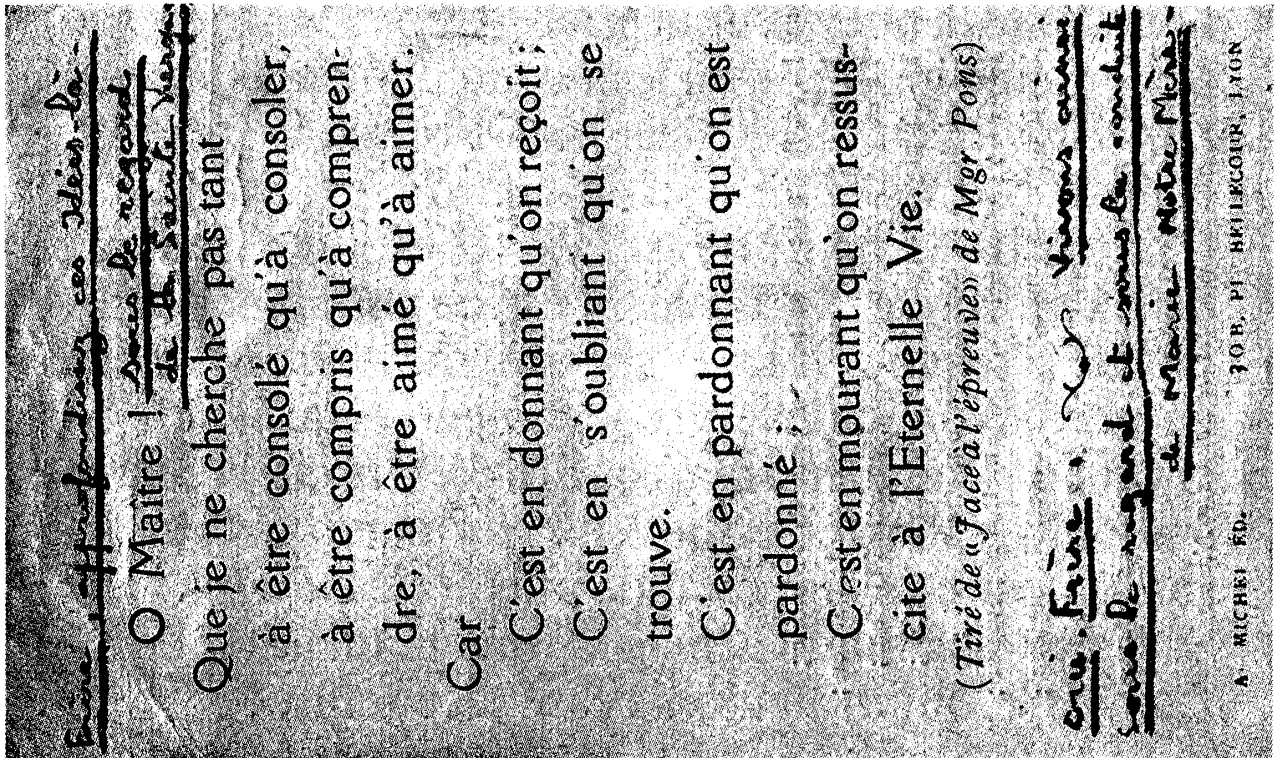
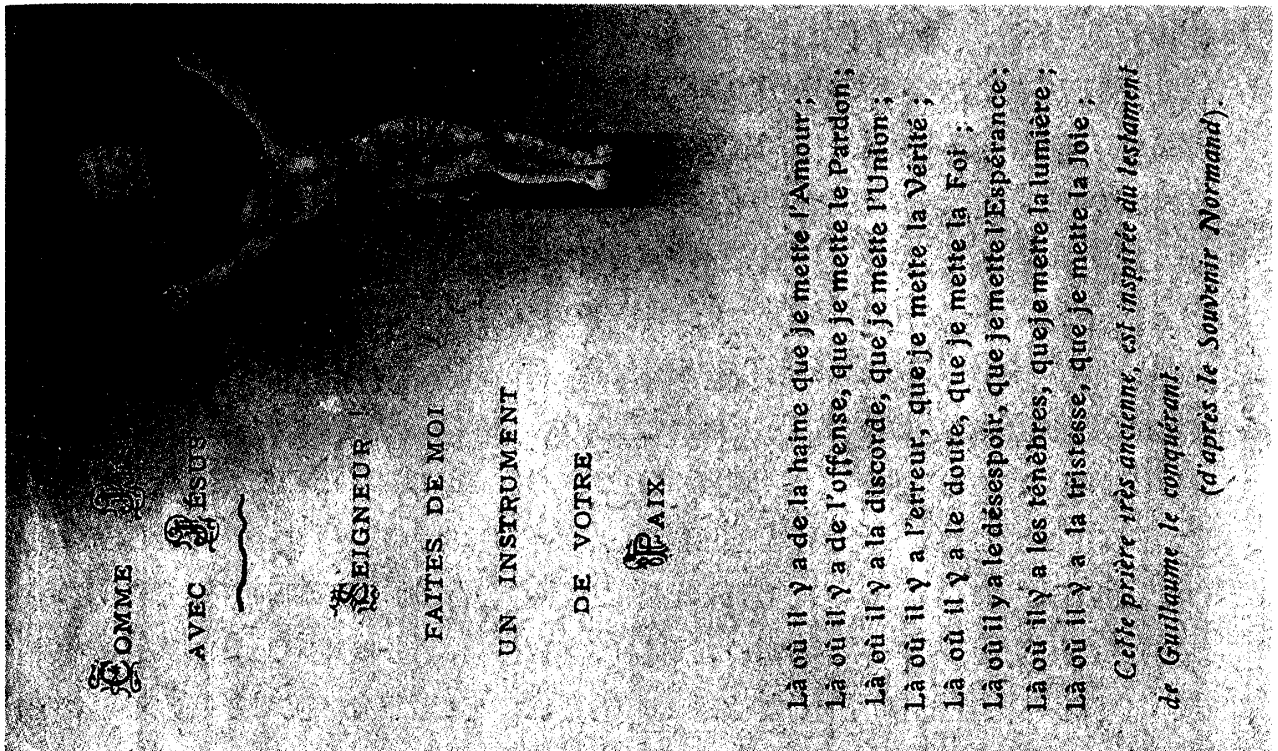
さらに、もうひとつの御絵がある。それは、アンジェ・ミシエル(1869-1930)によるものであり、1905年にリヨンで作られ、1926頃、フランスで多くの人々が持っていたものである。

(次頁、Renoux, “La Prière pour la Paix” p. 105より転載) 表には、「平和の祈り」の最初の部分とともに十字架上のイエスが描かれ、「イエスのように、イエスとともに」というタイトルがつけられている。さらに、興味深いことに、「この祈りはその起源が大変古く、ウィリアム征服王の遺言に基づいたものである」と付記されている。また、その下に、「スヴニール・ノルマンによる」という一言も添えられている。裏側には、「おお主よ、慰められることよりも慰めることを求めさせてください」以下の部分が書かれ、その下には、「ポン司教の『試練のときに』から掲載」ということわりがついている。しかし、この祈りのテキストは1917年版の『試練のときに』から抜き取られたものではなく、1912年の『鈴』のテキストとほぼ同じである。²³ アンジェはおそらくブークレール神父のテキストとポン司教のテキストの両方を読んでいたのかもしれないが、テキストとしてはブークレール神父のを選び、ポン司教やスヴニール・ノルマンのコメントもテキストの信憑性を裏付けるために付け加えたものと思われる。

このアンジェによる御絵はフランス全土のカトリック信徒のあいだにおおいに普及した。²⁴

8. プロテスタント信徒への広がり

その後、この「平和の祈り」はプロテスタントの人々の間に広まっていった。最初のきっかけは、ジュール・ランボー(1879-1949)という牧師が1920年に「プロテスタント同盟」という団体を組織して、ドイツとフランスの和解のために活動していたが、たまたまこの祈りに遭遇した牧師はその目的のためにこの祈りを使うようになった。²⁵ さらに、アルザス生まれのエチエンヌ・バッハ(1892-1986)という牧師が、1924年、『平和の君の騎士運動』(Mouvement des Chevaliers du Prince de la Paix、以下MCPと略す)という信心会を設立したが、先に述べたランボー牧師を介して、この祈りが『平和の君の騎士運動』に渡り、MCPはこの祈りを1925年12月、「平和の騎士団の祈り」と名付けるにいたった。興味深いことに、このときバッハ牧師が手にしたのは、『ラ・クロワ』やポン司教が載せていたテキストではなく、1912年にブークレール神父が『鈴』誌に掲載したものと同じなのである。しかも、ブークレ



*Recto et verso d'une image éditée par Ange Michel
à Lyon dans les années 1920
(Doc. Damien Vorreux. Bibliothèque des Franciscains. Paris)*

ル神父がつけたタイトル、「ミサの間に唱える祈り」というのを受け継ぎ、彼らの間では単に「美しい祈り」として広まっていった。そして、MCPは1927年以降、「平和の騎士団の祈り」というタイトルで絵葉書を作成し、ヨーロッパ中に、特に、スイスやベルギーで配布した。そして、この祈りを初めて「アシジの聖フランシスコによる」と付したのは、まさにこの団体なのである。それは、1927年8月、MCPが”Bois-Tizac”というパンフレットに、この祈りを紹介したときに、「アシジの聖フランシスコによる」という一節を「平和の騎士の祈り」というタイトルに付け加えていたのである。しかし、このときも、この祈りの作者は誰なのか、あるいは誰がフランシスコと結びつけたのか、詳しいコメントはない。²⁶

一方、ポール・サバティエ（1858-1928）という牧師が『聖フランシスコの伝記』（Vie de saint François）という本を出版しているが、20世紀初頭、プロテスタントの人々の間では、平和運動が大変盛んであり、このサバティエ牧師の著作は彼らに大きな影響を与えた。特にストラスブールでは、1919年に神学部の歴史学の教授職に就いたので、この周辺のプロテスタントの人々は彼の著書を読み、フランシスコについての知識は広まっていた。実は、1927年にMCPが「聖フランシスコによる」と付け加えたのもストラスブールにおいてであったのだが、これは全くの偶然なのであろうか、それともサバティエ牧師とMCPとになんらかの関係があったのであろうか。残念ながらそれを示す確実な証拠はない。

ストラスブールにおける聖フランシスコの影響はまだほかにもある。1923年には、牧師であり神学の教授でもあるウィルフレッド・モノド（1867-1943）は、クリスチャンには、キリストに従うことだけを願ったフランシスコの精神で生きることが必要と感じ、プロテスタントのフランシスコ第三会を創立した。²⁷

さらに、プロテスタント信徒によって、この祈りを広める運動が進められていった。それは特にスイスにおいて盛んであった。

1937年夏、ドイツ人牧師デルカト（1892-1970）がエキュメニズムの本部のあるジュネーヴのデュマス通りにある一室を借りて滞在していたが、その家の持ち主のマダム・マルティンという70歳の女性が、平和のために何かをしたいと申し出て、「アシジのフランシスコの祈り」をドイツ人の詩人に訳してもらい、スイスとドイツに広めたいという提案をした。彼女はこの提案をデルカト牧師にもちかけ、牧師はドイツ人の詩人を探すことを約束した。しかし、実際は、マダム・マルティンがまもなく亡くなってしまい、デルカト牧師は自身でドイツ語に訳して、1945頃からこの祈りをドイツに広めることとなった。彼もまたMCPのメンバーか少なくとも賛同者であった。²⁸

その次に挙げられる貢献者は、イタリア人、ジョゼフ・ランツァ・デル・ヴァスト（1904-1981）である。彼は詩人であり、アルシュのガンディー運動を組織していた人物である。1939年9月4日、ヴァストがスイスの教会で話をしたときに、この「平和の祈り」を、大変美しい祈りとして、テキスト全部を彼の共同体に紹介した。興味深いことに、このテキストは『ラ・クロワ』に依拠するものであって、「平和の騎士の祈り」によるものではない。²⁹

さらに、この祈りが広まった大きな要素としては、スイスのフランス語を話すプロテスタン

ト信徒による平和運動が挙げられる。1945年、ジュネーヴの教会は、平和運動とともにエキュメニズムの印として、新しい典礼を編み出したが、このとき、その中で「アシジのフランシスコの祈り」というタイトルでこの祈りが紹介されたのである。このときの祈りのテキストは、MCPが用いたテキストであり、1912年にブークェレル神父が『鈴』誌に掲載したものと同一であった。さらに、ジュネーヴの教会は聖餐式の最後にこの祈りを唱えるよう勧めており、1912年にブークェレル神父がミサの間に唱えるように勧めたのとよく似ている。これはジュネーヴの牧師たちが『鈴』を見たという証拠なのであろうか、それとも1945年のエキュメニズム運動のひとつの表れなのであろうか、その明確な答えは出ない。³⁰

9. 世界中に広まった「平和の祈り」

前節で述べたように、「平和の祈り」が広く知られるようになったのは、プロテスタントの人々の力によるところが大きい。第二次世界大戦の始まりとともに、世界中で平和を求める気運が高まり、この祈りはさらに、世界各地へと広がっていった。

ドイツでは、この祈りはまずカトリックの信徒の間に広まった。ドイツ語訳はプロテスタントのデルカト牧師によってなされたが、1940年、ザルツブルグで、カトリック信徒のディレルズベルガーが聖務日課書の中に挿入して印刷したためである。こうして、ドイツではエキュメニズムの印として、プロテスタントにもカトリックにもこの祈りが浸透していった。³¹

この「平和の祈り」はやがて大西洋を越え、アメリカとカナダに入っていた。それは、第二次世界大戦の開始直後のことである。このとき、アメリカでこの祈りの普及に貢献したのは、フランシス・スペルマン枢機卿である。彼は、ローマで神学生として勉強をしていたときに、1916年1月号の“Osservatore Romano”を読んで大変感動し、同年に叙階した際、また、1939年の大司教任命の際に、この祈りを自分の理想の霊性として定めたのである。そして、1939年から1967年まで、従軍司祭を担当していたこともあり、また、聖フランシスコが自分の守護の聖人でもあることから、「フランシスコの祈り」の普及に努めたのである。³²

フランスでは、この祈りが「フランシスコの祈り」と書かれるようになったのは1947年である。この年、ジョゼフ・フォリー（1903-1972）が発行していた、“L' Apple de la Route”（カトリック国際運動である「聖フランシスコの仲間」の機関紙）の中で、はじめてこのタイトルが付けられている。このとき同時に、聖フランシスコの絵が描かれた「平和の祈り」のしおりも発行されたが、このしおりのテキストはランスの第三会のために作られたしおりと同じものが使われている。³³

イギリスでこの祈りが紹介されたのは、1936年のことである。ロンドンで、放送用の英語版「毎日の祈り」というのがあり、その中に取り入れられた。³⁴ その後、1941年には一般の「毎日の祈り」の中に印刷された。また、1945年の終戦時には、勝利を感謝して新たに印刷された。

オーストリアでは、1940年に初めて紹介された。また、ドイツでは、一部に知られていたようであるが、多くの人々が目にするようになったのは、1945年、第二次世界大戦が終わってイ

ギリスで捕虜となっていたドイツ人たちが国に持ち帰ってからのようである。

そして、アメリカでは、1945年10月24日、国連の会議がサンフランシスコで行われたとき、その席上、上院議員のトム・コナリーが「平和の祈り」を読み上げたと伝えられている。³⁵ サンフランシスコという街の名前と平和のパトロンである聖フランシスコのイメージとがあいまって、この祈りが「フランシスコの平和の祈り」と呼ばれるにふさわしい要素が絡み合っ、自然にこのような名で呼ばれるようになったのも不思議ではない。

このような状況から、日本にこの祈りがもたらされたのは、堀田神父が推測するように、おそらく第二次世界大戦後ではないかと考えられる。

10. 「平和の祈り」の分析

では、次に、「平和の祈り」の文体やその特徴について調べてみる。

この祈りは大きく分けると、3つの部分から成り立っている。

ああ主よ、われをして御身の平和の道具とならしめたまえ
われをして憎しみのあるところに愛をもたらしめたまえ
争いあるところに許しを 分裂あるところに一致を
疑いのあるところに信仰を 誤りあるところに真理を
絶望あるところに希望を 悲しみあるところによろこびを
闇あるところに光を もたらしめたまえ

ああ主よわれをして慰めらるることを求めずして慰めることを求めしめ
理解さるることよりも理解することを
愛さるることよりも愛することを求めしめたまえ

そはわれらは自ら与うるがゆえに受け
許すがゆえに許され
おのが身を捨てて死するがゆえに永遠の生命を得るものなればなり

前述のように、この祈りは、「スヴニール・ノルマン」によってウィリアム征服王の遺言によるものとされていたのであるが、これまで、その理由をはっきりと示されなかったが、1996年に、ロシュトン侯爵がベネディクト15世に当てた手紙がバチカンの教皇庁保管庫で発見されたことによって、「スヴニール・ノルマン」とウィリアム征服王の遺言との関係が明らかになり、ウィリアム征服王の遺言によるところが大きいということが証明されることとなった。このことに関しては、手紙が発見される前から、バルビエール神父に続く何人かの学者が、第一の部分に関しては遺言の影響は正しいだろうと指摘してきた。³⁶

第一の部分に関するその他の説としては、当時のカテキズムによるものではないかというも

のである。19世紀末から20世紀初頭にかけて、神のいつくしみの7つのわざが、カテキズムで再び教えられたのであるが、第一部の願いの多くがこのカテキズムから出てきたものと考えられる。³⁷

一方では、「誤りと真理」、「闇と光」のように対立する二つの語を並べるといふ対照法は、中世の祈りによく用いられたので、この祈りの原典を中世に求める研究者もいる。その原典とは、11世紀の偉大な神学者アンセルムス(1033～1109)やシトーのエルレドの祈りではないかと指摘しているのである。³⁸ アンセルムスの祈りの中には次のような祈りがある。

わが神よ、わが憐れみよ、御身のいと愛すべき御子によりて願い奉る。憐れみのすべての業を、熱き信仰心を与え給え。悲しむ者には同情し、貧しい者を助け、迷える者には助言し、嘆く者を慰め、虐げられる者には救いの手を差し延べ、乏しい者には健康を回復させ、病弱の者を元気づけ、借りのある者を免除し、我に罪を犯せし者を赦し、悪人には善を返し……。

また、シトーのエルレドの「牧者の祈り」というのは、次のようなものである。

甘美なる主よ、我に学ばしめ給え。心安らかならざる者を強め、恐れる者を慰め、病弱な者を元気づけんことを。また、人それぞれに応ぜんことを学ばしめ給え。その人となり、習慣、気性、才能、単純さ、所と時とに合わせて、御身がふさわしいと見られるままに……願わくは、[隣人につき]弱りしと御身が見られるものを強め、虚弱な者を拒まず、病める者を癒し、悲しむ者を喜ばせ、生温かき者を燃え立たせ、変わり易き者を落ち着かせ……我をして成さしめ給え、御身の僕、賜るものすべての忠実な分配者、正しき配付者、賢き管理者と……

このような対照法は、問題の「平和の祈り」にも見られ、中世の祈りと言えないわけでもないが、文体自体は異なっていると思われる。また、対照的な言い方は聖フランシスコの祈りにも見られるので、フランシスコ自身が作った可能性も全く考えられないわけではないが、研究者たちが指摘するように、やはりフランシスコの文体とは異なっているので、直接フランシスコが作ったとは考えにくい。

1975年、今度は、ジェローム・プーランクというフランス人フランシスコ会士が、新しい説を唱えた。彼によれば、1899年にレオ13世が提唱した「聖心にささげる祈り」が基になっているのではないかという。「聖心にささげる祈り」は、1899年、レオ13世によって公表され、ピオ10世が1905年に、一年に一度唱えるよう命じた。そして、この祈りは20世紀初め、カトリックの祈りとして最も使われたが、この祈りの原本は次のようである。

神よ、誤謬のうちに生きる人々、反目によってあなたから離れた人の王となってください。信仰の一致と真理の港に連れ戻してください。これから一人の牧者と一つの

群れになるように。古い異端的迷信にまだ生きている人の王になってください。暗闇から光へ、また神の国へと招くことを拒否しないでください。主よ、何も邪魔するものがない、確かな自由を教会に与えてください。すべての民に平和と秩序を与えてください。

この平和の祈りの中には、世紀末を迎え、戦争や不信仰の影が見え隠れしている時代に関連したテーマが見いだされる。確かに、「誤り、不一致、真理、信仰、闇、光、平和」などのことばは、問題の「平和の祈り」と共通しているが、文章の構造自体は異なっている。

次に、平和の祈りの第二の部分であるが、「アシジのジル (エジディオ) 修道士の語録 (教え)」から採られたのではないかという説がある。この説を唱えたのは、シカゴのジェイムズ・メイヤー (1883-1955) というフランシスコ会士で、彼が出版したフランシスコ全集の第8章で、第二の部分が『兄弟エジディオのことば』によく似ていると述べている。³⁹ ヴィリブロードもこの点に賛同している。では、「兄弟エジディオのことば」とはどのような内容であろうか。

幸いなるかな、真に愛しても、愛されたいと思わない者。幸いなるかな、恐れても、恐れられたいと思わない者。幸いなるかな、仕えても、仕えられたいと思わない者。親切に振舞っても、親切に振舞われたいと思わない者。

第二の部分は

ああ主よわれをして慰めらるることを求めずして慰めることを求めしめ
理解さるることよりも理解することを
愛さるることよりも愛することを求めしめたまえ

である。

この二つを比べてみると、テキストの構成は非常によく似ていて、二つの反対のことばがシンメトリーになっている。「兄弟エジディオのことば」では能動態—受動態であるのに対して、「平和の祈り」では受動態—能動態と逆になっている。プーランクによれば、この「兄弟エジディオのことば」は、19世紀後半にフランスで人気があり、広く使われていたようである。この頃、フランシスコ・ファミリーに属する多くの信者が小さな本を持っており、それはフランシスコの「小さき花」のフランス語訳のものと合本になっていた。そして、1902年に出版された第七版の本中に、この「兄弟エジディオのことば」が載っており、この本はよく初聖体の記念のプレゼントとして使われたという。⁴⁰ このような状況から考えてみると、プーランクもヴィリブロードも指摘するように、「平和の祈り」の作者は「兄弟エジディオのことば」の影響を大いに受けた可能性があるだろう。⁴¹

そして、最後の第三の部分は、前の部分に表されている内容を受けて、イエスのへりくだりのことばを具体的に表現しているのである。つまり、次の3つのテーマがそのまま盛り込まれ

ている。

- ① ルカ6・38：「与えなさい、そうすればあなたも与えられる」
- ② ルカ6・37：「許しなさい、そうすれば、あなたも許される」
- ③ ルカ17・33：「自分の命を救おうとするものは、失い・・・」
ヨハネ12・25：「自分の命を憎むものは、永遠の命を得る」

以上のように、「平和の祈り」の構造に関しては、さまざまな影響があることがうかがい知れる。しかし、最終的にこの祈りの作者を特定することはできるのであろうか。

11. 「平和の祈り」の作者

最後に、この「平和の祈り」の作者は誰であるのかという問題が残る。

祈りの形が中世風だということで、フランシスコの弟子の一人が、日ごろフランシスコが申されていた言葉や教えをまとめたものに、フランシスコの名を冠したものと思われる、とする研究者もいるが、現在ではほとんどの研究者が、19世紀末から20世紀初頭の間には作られた可能性が高いと指摘している。そのひとつの証拠として挙げられるのは、中世に作られた祈りにおいては、一人ひとりの人間の自分の救いや罪の赦し、霊肉の悪からの保護を求めるといったような個人的救いの傾向が強く、個人と社会とのかかわりという点はあまり高くなかったということである。その点、「平和の祈り」では、「主よ、私を平和の道具にしてください」というように、自分と社会とのかかわりを強く願い求めているので、近代的な性格を持っているといえるのである。

したがって、作者はウィリアム征服王の遺言や「兄弟エジディオのことば」に触発され、それに加え、20世紀初頭に普及していた「聖心にささげる祈り」の影響を強く受け、世界が戦争や不信仰から救われるように願いを込めたと思われる。

では、これまでに名前の挙がった人々の中にその作者はいるのであろうか。

最初に「平和の祈り」が掲載された『鈴』誌を発行していたブークエレル神父は文才豊かであったので、その可能性はあると思われるが、もう一方で発行していた『スヴニール・ノルマンパーリーオルネ』誌を見ると、内容は反ユダヤ的であり、カトリック右派のかなり過激な保守的立場に立っていたので、「平和の祈り」の作者であるとは思われない。

しかし、ファン・ディックの研究により、『スヴニール・ノルマンパーリーオルネ』誌は、ブークエレル神父が発行したものであるのだが、この雑誌はパリにおいては、当時フランスでかなり有名であったフランシスコ会士エドワール・ブリエール神父(P. Edouard Brière)によって書かれたということがわかったのである。⁴² そして、ブリエール神父は『鈴』誌の発行主体である信心会の熱心なメンバーでもあった。このことから推測すれば、ヴォローが述べているように、『スヴニール・ノルマン』巡礼団が教皇ベネディクト15世に献呈した「平和の祈り」は、少なくともこのブリエール神父を通じて、『鈴』誌と結びつく可能性があるのかもしれない。⁴³ さらに興味深いことに、エステル・ブークエレル神父(P. Esther Bouquerel)とエドワール・ブリエール神父(P. Edouard Brière)とは、二人ともイニシャルは“E. B”であ

る。そうであれば、パリで発行された『鈴』誌にブリエール神父も関わっていた可能性があり、この「平和の祈り」の作者である可能性もある。フランシスコ会の司祭ということもあり、最も有力な候補と言えるかもしれない。

一方、ロシュトロン・グラント侯爵がピエールフィットのジャン・スーダンという人と二人で創設した団体である「スヴニール・ノルマン」は、ウィリアム征服王の遺言を利用して、ヨーロッパ全土を一つのカトリックの国としたいというもくろみが強く、「平和の祈り」を『平和の聖母』から転用しているのので、この二人が「平和の祈り」の作者であるとは考えにくい。

また、ランスで発行された御絵に関わっていたカプチン会のエチエンヌ・ベノワ神父であるが、この祈りが聖フランシスコの精神をよく表しているということで、「聖フランシスコの平和の祈り」というタイトルをつけた可能性はあるが、祈りのテキスト自体が『鈴』誌のオリジナルではなく、「スヴニール・ノルマン」のテキストであることから、祈り自体の作者とは思われない。

したがって、作者として一番有力な人物は、エドワール・ブリエール神父であるが、それも確証はなく、結局、作者はいったい誰なのか、結論を導くことはできない。ただ、この祈りにはっきりと「アシジの聖フランシスコによる」と付したのは、プロテスタントの「平和の騎士団」であることは疑いない。このプロテスタントの団体が、カトリック信徒よりも先に、聖フランシスコの平和とエキュメニズムの精神をこの祈りから読み取って、広く伝える役割を果たしたということには大きな意義がある。

20世紀初頭の平和運動の流れから、「平和の人フランシスコ」の名が挙がってくるのは、ある意味当然のことであろう。そして、この祈りの中に描かれている理想の人間像はイエス・キリストであり、聖フランシスコは「第二のキリスト」と呼ばれるように、徹底的にキリストの生き方に倣った人である。フランシスコは自分でこの祈りを書き上げたのではないかもしれないが、実際にこの祈りを生きた人であることは言えるであろう。それゆえ、まさしくこの祈りが「フランシスコの祈り」にふさわしく、世界中の人々がフランシスコその人が書いた祈りと疑わずに祈り続けてきたのであろう。

作者は不明のままであるかもしれないが、この「平和の祈り」はキリスト教の本質を短く単純に表現し、時代を超えて唱えられるすばらしい祈りであることに変わりはない。

- ¹ Renoux, Christian, “La prière pour la paix attribuée à saint François: une énigme à résoudre,” Les Éditions Franciscaines, 2001, p.141—142
- ² ヴォロー神父はたまたまボーシェヌ小教区で、『平和の聖母』誌のシリーズを見つけ、その1913年1月号 No. 95の中に、「ミサのあいだに唱える祈り」を見つけた。これはまさしく『鈴』誌を参照としているものであった。この時点では『鈴』誌はまだ見つかっていなかった。
- ³ Renoux, “La prière pour la paix attribuée à saint François: une énigme à résoudre,” p.25
- ⁴ Ibid., p.27
- ⁵ Ibid., p. 30—31
- ⁶ Ibid., p.32
- ⁷ Ibid., p.33—34 この地で1923年5月3日、68歳で死去。
- ⁸ Ibid., p.44—47
Là où il y a de la discorde, …
Là où il y a de l’erreur, … の下線部の二箇所が『鈴』誌のオリジナルと異なっている。
- ⁹ Ibid., p. 47
- ¹⁰ Ibid., p.53—54
- ¹¹ ここではイタリア語版で掲載されている。
- ¹² Ibid., p. 58
- ¹³ 教皇自身も平和の祈りを作っており、ローマカトリック教会のために、全ヨーロッパの教会では1915年2月7日の日曜日に、その他の国々では3月21日の日曜日に唱えるよう指示している。
- ¹⁴ この祈りは『鈴』誌に掲載されていたテキストとほとんど同じである。
- ¹⁵ 当時、19世紀半ばからカトリックの精神として御心に対する信心が盛んであった。
- ¹⁶ Renoux, “La prière pour la paix attribuée à saint François: une énigme à résoudre,” p. 63
Là où il y a de la haine→Là où est la haine
Là où il y a de les tenebres→ Là où sont ténèbres
Maître, que… → Seigneur, faites que je ne cherche pas tant d’être console que de consoler, のように下線部が変更されている。
- ¹⁷ Ibid., p.65
- ¹⁸ Ibid., p.66
- ¹⁹ Renoux, “La prière pour la paix attribuée à saint François: une énigme à résoudre,” p.68
- ²⁰ Ibid., p.69
- ²¹ 堀田雄康、「平和の祈り—その由来と翻訳—」（『堀田雄康神父遺稿』）、聖アントニオ神学院、1987年 p.5—17
- ²² Renoux, “La prière pour la paix attribuée à saint François: une énigme à résoudre,” p.72
- ²³ “Là où il y a de l’ offense” と “C’ est en s’ oubliant qu’ on se trouve” の下線部分のみが異なる
- ²⁴ Renoux, p.106
- ²⁵ Ibid., p.75
- ²⁶ Ibid, p.79 —81
- ²⁷ Ibid., p. 85

-
- 28 Ibid., p.89
- 29 Ibid., p.89—90
- 30 Ibid., p.90—91
- 31 Ibid., p.91—92
- 32 Ibid., p.92—93
- 33 Ibid., p.96—97
- 34 1936年版では、「そはわれらは自ら与うるがゆえに受け、許すがゆえに許され、おのが身を捨てて死するがゆえに永遠の生命を得るものなればなり」の部分が付いていない。
- 35 Renoux, p.93
- 36 Ibid., p.158
- 37 Poulenc, Jérôme, “L’inspiration moderne de la prière ‘Seigneur, faites de moi...!’”
Archiv.Francisc.Histor.68 (1975), p.452
- 38 堀田雄康、「平和の祈り—その由来と翻訳—」、p. 20
- 39 Renoux, p.143
- 40 Poulenc, Jérôme, “L’inspiration moderne de la prière ‘Seigneur, faites de moi...!’”
p.452
- 41 Renoux, p.154
- 42 Ibid., p.152
- 43 Damien Vorreux, “Note sur la ‘Prière pour la paix’ attribuée à S. François,”
Sources Chrétiennes N. 285, François d’Assise Ecrits, Paris, 1981, p.404—405

参考文献

- (1) Frieder Schulz, “Das sogenannte Franziskusgebet,” *Jahrbuch für Liturgik und Hymnologie* 13 (1968), pp. 39-53 F. シュルツ 「伝フランシスコ作の祈り」
- (2) Willibrord van Dijk, “Une prière en quête d’ auteur,” *Évangile Aujourd’hui* 86 (1975), pp. 65-70 W・ファン・ディック 「原作者が問題の祈り」
- (3) Jérôme Poulenc, “l’ inspiration moderne de la prière ’ Seigneur, faites de moi... ’,” *Archiv. Francisc. Histor.* 68 (1975), pp. 450-453
J. プーランク 「現代人の霊性と『平和の祈り』」
- (4) Damien Vorreux, “Note sur la ’ Prière pour la paix ’ attribuée a S. François,” *Sources Chrétiennes* N. 285, *François d’ Assise Ecrits*, Paris, (1981), pp. 403- 405
D. ヴォロー 「伝聖フランシスコ作『平和の祈り』覚書」
- (5) 堀田雄康、「平和の祈り」—その由来と翻訳—（『堀田雄康遺稿』）、
聖アントニオ神学院、1987
- (6) Christian Renoux, “La prière pour la paix attribuée à saint François: une énigme à résoudre ,” *Les Éditions Franciscaines* , 2001,